

喜多流の能装束など紹介

能に使われる装束や能面に見入る来館者



備後地方で能の普及に努めている、福山市光南町の喜多流大島家が所有する能装束や能楽器、掛け軸などを集めた企画展「能・喜多流と福山」が、同市西町、県立歴史博物館で開かれている。28日まで。

福山藩初代藩主・水野勝成（1564～1651）が同藩の武家に広めたときれる喜多流は、江戸時代中期以降には町人にも流行。明治時代になると一時期衰微したが、同藩士だった大島七太郎が師匠の跡を継いで復興させた。以後、大島家は現在の4代目政允さん、5代目輝久さんらに至るまで、能の普及に努めている。

展示では、江戸末期の能管や小鼓などの楽器のほか、舞台上使われている能面や装束、写真パネルなど55点を展示。能面と装束は、どんな演目で使われるかなども説明されている。

同家の能楽師、大島衣恵さん（34）は「面や装束と、それを使って演じている場面を撮影した写真とを見比べながら、能の雰囲気を感じとってほしい」と話していた。

back

08/09/15
読売新聞